

株式会社グーテンベルクオーケストラ代表取締役

『Esperanto Culture Magazine』編集長

菅付雅子様

2021年1月21日

一般財団法人日本エスペラント協会

理事長 北川郁子

拝啓

本会から御社には「御社の誌名について違和感がある」旨の連絡をさしあげておりましたが、あらためて本会から下記を要望いたします。

#### 【要望】

御社の発行する英文雑誌の正式表題および題字（ロゴなど）から“Esperanto”を外していただけるよう要望いたします。

#### 【本要望の背景】

御社からは丁寧に雑誌『Esperanto Culture Magazine』創刊と命名の背景として、エスペラントの持つ理念への共感をもとに“Esperanto”をメタファーとして使用しているとの話を伺い、この点は私どもも一定の理解はしております。さらに、御社が英文雑誌を通して掲げる「国際交流・異文化交流の促進」が、「国際語エスペラントを普及発展させることにより、国際相互理解を促す」という本会の目的と合致する部分があることも理解いたします。

一方、エスペラントはご存じのように機能している言語であり、この言語を使って著作、文化活動を行い、また学習、普及運動などを行っている人びと、団体が多数存在しております。その中で、“Esperanto”というのは、その実体を表す強力な手段です。御社が用いるメタファーによって、言語や文化が関係する分野において、“Esperanto”あるいは「エスペラント」という言葉の意味が、実体としてのエスペラントという言語と無関係に横滑りしていくことを本会は危惧いたします。

世界エスペラント協会は、その単語そのものを使った雑誌『Esperanto』を発行しており、私どもも、日本語表記である『エスペラント』という雑誌を発行しております。

もちろん、私どもも含めて何人も“Esperanto”という語を独占も排除もできません。しかしながら、上記のことから、“Esperanto”という語を英語書き雑誌の誌名に用いることは、この言語をすでに使っている人はもちろん、一般の人々にも誤解を与えることとなります。この点が、以前から私どもが「違和感がある」と申し上げている事柄の中心になり、諸方面の人びと等から様々な形で出されている疑問、抗議、異議の源となっていると思われまます。

ご賢察の上、要望に記したとおりのご検討をお願いする次第です。

敬具